

Think the Earth Paper

シンクザアースペーパー

Think the Earth Paper vol.11
Autumn-Winter 2012-2013

EARTHLING Interview

流域思考

人間が完全に忘れてしまった「自然の地図」を
文明としてもう一度作りなおし、身体化させなければいけない。

岸 由二

慶應義塾大学教授

NPO法人鶴見川流域ネットワーク代表理事

鶴見川流域：
鶴見川の全長はマラソンコースとほぼ同じ 42.5キ
ロメートル。源流は東京都町田市に発し、横浜、川
崎を経て、横浜市鶴見区生妻で東京湾に注ぐ一級河
川です。流域面積は235平方キロメートル。2003年
時点で、その85パーセントが市街化され、188万人
が暮らしています。かつては「ごみの川」とも評され
ましたが、現在は自然再生活動も盛んとなり、アユ
も遡上するほどに改善しています。

EARTHLING Interview

流域思考とは何か。

岸 由二

Yuji Kishi

慶應義塾大学教授

NPO法人鶴見川流域ネットワーク代表理事

地球の生態系、「流域」をベースとした都市再生論を専門とし、神奈川県三浦半島小網代や鶴見川流域で環境保全・防災支援活動を展開する岸由二さん。「流域思考」とは何か、なぜいま必要なのか。その答えには、私たちがアースリングとして生きるためのヒントがある。

写真●永禮賢 取材・文●井出幸亮



足元の大地を、暮らしのためのホームグラウンドと捉え、地べたの地図感覚を持った「地球人」をめざそう。

自然の地図をみんなが自覚し、共有することの大切さ

人間は生きる上で必ず「地図」を参照しています。あまりにも基本的な前提なので意識されることがないのですが、私たちは常に何らかの地図を基準にして、あらゆるものを認識してきました。例えば今から1万年前、人類が狩猟採集をしていた時代、当然ながら抽象的な地図はないわけですから、獲物を探して捕らえるためには山や川、池、海などの地形をもとにして場所を認識するしかありませんでした。これが農耕の時代になると、狩猟をしていた頃のように山野を歩きまわる必要はなくなり、人間が定住したり所有したりしている場所が「ホームグラウンド」として無意識の地図の基盤となります。いづれにしても、こういった自然そのものを基準にした地図を長い間、人間はさまざまな形で使ってきたわけですが、産業文明の到来以後、この種の地図はどんどん衰退しています。道路や鉄道などの交通手段が移動をサポートしてくれるから。自然の地図は意識する必要がないんですね。それに代わって、「行政区分地図」ばかりが強調されるようになりました。〇〇県〇〇市〇〇区……というような、郵便を届けたりするための地図ですね。元になっているのは「デカルトマップ」です。「緯度・経度」という形で、自分が今どこにいるかがマトリックス上に指定されている。

当然ですが、「デカルトマップ」は地球とい

う自然の都合にあわせた地図ではなく、人間の都合にあわせて空間をグリッドで分割したものです。かつては地球上のすべての人々が認識し、共有していた「自然の地図」という非常にベーシックなものが、今ではほとんど忘れ去られ、地理学者や河川管理者などの特別な人々ばかりが使用するものになっています。雨も風も、災害も含めた自然の姿は変わっていないのに、現代人はその都合をまったく無視した地図を使って、あらゆることを進めているんですね。その典型のひとつが現行の都市計画です。

都市計画区域は「市街化区域」と「市街化調整区域（市街化を抑制すべき区域）」の二つに分けられますが、それらを指定するとき、現状の法律では自然の凸凹、形状に配慮する必要がないんですね。植物の植生図くらいしか見ていない。例えば、私が1980年代から保全活動をやってきた神奈川県三浦半島・小網代地域のような緑に覆われた岩盤の深い谷が、つい2年前まで第一種住居専用地域だったりするわけです。理由は「駅から近い」というだけ。しかし自然災害などに最も影響を与えるのは地べたの形状です。地べたが水害を作る。放射線の拡散についても同じでしょう。おかしいと思いませんか。

私の考える「流域思考」とは、そういう自然の地図をみんなが自覚し、共有することで、水害などの災害の防止・減災や、生物多様性の保全に役立てようというものです。例えば、横浜・鶴見川下流の低地の市民は、かつて日常的に河川の氾濫に悩まされたのですが、氾濫を起こす

水のかなりの部分は、はるか上流の町田市や川崎市の丘陵地に降った雨なのです。しかし今そこに住む多くの市民には、そういった想像力がありません。自分の足元がどのように自然の地図の中に位置づけられているか、身体的に理解できていない。そんな状況を放置してはだめですね。いま都市市民が完全に忘れかけている「自然の地図」を、文明としてもう一度作りなおし、身体化させなければいけない。それは10年、20年でできることではなくて、10世代、300年かかる大事業になると、私はみえています。

地球の地図を忘れた産業文明の人々が正気を取り戻すために

「流域」とは、「雨の水が水系に集まる大地の範囲」と定義される領域、自然ランドスケープの基本単位ですね。この「流域」という単位が、自然の地形の複雑な凸凹を要素化し、共有しようとする時、非常に分かりやすく使える。もちろん自然の姿を認識するためには、流域という単位を使わなくても、丘陵や平野などでも可能だし、色々な方法があるわけですが、流域には「入れ子構造」というパターンを持つ特徴があり、これが極めて重要と私は考えています。

例えば、自分のいる状況を説明するとき、「私は今、日本の〇〇県〇〇市〇〇区にある〇〇大学の〇〇学科で学んでいます」という形で、区切る範囲をどんどん狭くしていきながら伝えることができますよね。不思議なことですが、こういうフラクタル的構造を持った階層的な区切

りで自分の位置を特定していくと世界に帰属する安堵感のようなものがある。「ここは自分の街だ」とか「自分の学校だ」とかいう意識が芽生えて、安心感を持ったりする。こういう普遍的な不思議さを、私は甘く見ないで尊重するんです。「流域」地図は、人が人為的に設定する行政区画が明確に持っているそんなフラクタル構造とほぼ同じものを、分水界という自然の境界を基準にして作ることができるんですね。水系の階層構造に対応して、全体流域、亜流域、小流域、微少流域といった階層構造ができる。例えば、今いるこの場所を表現する場合なら「鶴見川流域、下流域、綱島左岸高水敷……」という具合です。それはアマゾン川でもどこでも同じようにできます。

流域は「雨が降る地べたには必ず存在する」という意味で、「普遍的な特殊解」とも言えるものです。人間が暮らす生命圏の足元の地図としてこういった表現が可能な地形単位は、さしあたり「流域」以外に見当たらない。デカルトマップももちろん重要なものですが、もう一つのホームグラウンドマップとして、この「流域」という概念をもとにした地図を意識し、共有してみたらどうなるだろうか。

もしある地域の人口の1万～1000分の1の人々だけでも、これをはっきり意識して共有していれば、地べたを扱う都市計画において革命が起こるでしょう。それらの人々の意見で、世の中が動いていくのです。「流域」は「地球の地図」を忘れた産業文明の人々が正気を取り戻す

ために必要なものです。これをどこまで使いきれるか、私自身もまだ分かりませんが、これからの災害対策や環境保全において、非常に重要であることはまず間違いなさだろうと信じています。

子どもの頃から自然に浸かり 足元の大地の広がり愛着を持つ

私は流域地図という、地球の生態系の都合に沿った地図を作り、多くの人々に共有してもらいたいと考えているわけですが、これを「地球語を喋る」という表現に言い換えてみましょうか。言語を身体化するまで習得するには、小さい時からその環境に浸っているか、反復し訓練するかのどちらかが必要ですが、自然の地図の習得も同じ。母語のように、「マザーマップ」として身につけるか、外国語を修得するように身につけるか、路があるということです。その際、勉強で強制する方法ではたぶん流域そのものへの愛着を育てることは難しい。やはり子どもの頃に魚取りをした水辺とか、探検して虫を取った雑木林だとか、そういう特定の場所に対する思い出を力として愛着は湧く。その上で、海が好きなのも川が好きなのも山が好きなのも、そして町が大好きなのも、同じ流域で連携できる存在なんだと意識できる、そういうことが重要なんだと思いますね。

私は横浜の鶴見川河口の町で育ちました。子どもの頃から、何度も水害に遭いました。1985年に流域活動を始めようと源流にあたる町田の団地に転居し、91年には〈流域地図を共有し、安全・安らぎ・自然環境重視・次世代重視〉の流域文化育成を目指す流域市民連携「鶴見川流域ネットワーク」(TRネット)を創設し、あしかけ21年、流域活動を続けています。

この鶴見川は、東京都は町田市と稲城市の2市、神奈川県は横浜市6区(青葉、緑、都筑、港北、鶴見、神奈川)、川崎市の5区(麻生、宮前、高津、中原、幸)とこれだけの行政区にまたがって、蛇行しながら流れている川です。いずれも主体性を持った行政区ですから、それぞれに街づくりや防災の計画を立てるのですが、実際の川はすべてつながっている。鶴見区で水害を引き起こす氾濫水のかなりは、源流の町田市や支流上流の川崎市の丘陵地に降った雨。行政地図の人為的な枠を越えて「鶴見川流域」という自然ランドスケープ、生命圏の地図で対応しなければ大水害は防げないのです。

かつては行政区分を越えた連携が難しく、長い間、豪雨氾濫が続いていましたが、1980年に当時の建設省が「鶴見川流域総合治水対策」を始め、国の調整・支援のもとに全自治体をつなぎ、「流域」の単位で連携する治水を進めました。河川や下水道の基本的な整備だけでなく、源流域の町田市では大規模な保水の緑が調整区域として維持され、上・中流域の丘陵地帯では雨水を蓄える雨水調整池が多数工夫され、各地に遊水池を作るといった努力が続けられました。その結果、1982年以後は大きな水害は起きておらず、10年に一度程度の豪雨には、ほぼ完璧に治水対応ができています。一級水系の中で流域丸ごとの連携の仕組みができてるのは鶴見川しかありません。しかし、これだけ全力でやっている場所でも、50年、60年に一度の規模の豪雨が降れば危ない。150年に一度の大雨に対しては、場所ごとの予想水没レベルを示したハザードマップを作成して住民に配布する程度の対策しか取れていないのが現状です。

今後、地球温暖化が進み、海面上昇、大豪雨の時代になるにつれ、豪雨の降る確率が倍以上になる、その雨の規模もかなり大きくなると予想されています。それなのに現段階では100年単位の豪雨対応もできていない。200年、300

年に一度の豪雨に対しては、総合的な被害の予想も不明確です。東北大震災以後、行政は「千年に一度」の津波対策に集中していますが、津波で2～3メートル水没するとされる地域が、たった10年に一度の河川の氾濫でも、土手がなければ3～4メートルの浸水をする。津波対策はもちろん緊急ですが、豪雨水害への対応も、喫緊の課題なのです。安全の総合的な実態と関係なく、政治的な「空気」だけで災害行政が動いてしまうとしたら、大変な問題だと思います。

私たちはもう一度 地球に暮らしなおすことができる

現代の地球人は、日々の暮らしの地図を足元の「地球の地べた」に定めない、エクストラテレストリアル(E.T.=宇宙人)のようなものです。日々生きているこの大地を、自らケアし、安全に、安らぎをもって暮らす場所とは、感じていない。地球を資源や素材としてだけ捉え、いつか地球を使い尽くしたら宇宙にいけばいいんだと、心のどこかでぼんやりと夢想する文明規模の倒錯のようなものがあると感じます。しかし

それでは、地球環境問題は解決に向かうことはありません。こういった問題を生み出している原因は、都市を基盤とする産業文明であることは明らかですが、世界人口の約70億人の半分以上が都市住民である今、都市を否定しても何も始まりません。人間は都市が大好きです。それは肯定すべき現実ですね。私だって都市が好きです。

しかし問題の核心が都市であることは間違いない。地球温暖化によって、やがて大きな海面上昇が現実となり、豪雨傾向が強まれば、海辺の都市群は巨大水災害に見舞われてゆく。だからこそ先進国の先端都市の真ん中から変えていくしかない。その時、「流域で考える」ことが現実的なベストの地図戦略になり得ると思っているんです。

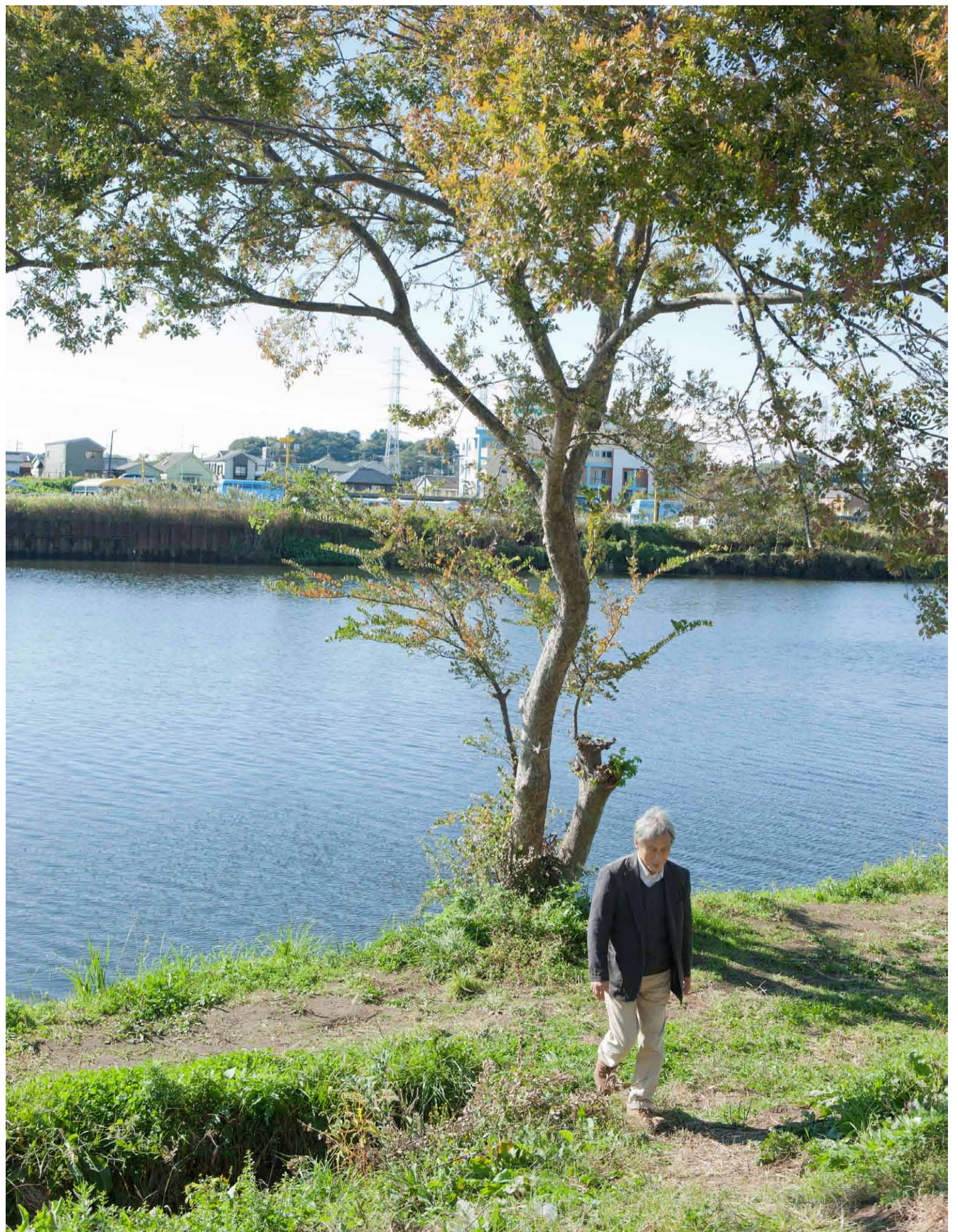
巨大都市の真ん中で、よちよち歩きの頃から遊びなおし、学びなおし、足元の大地を資源や素材、抽象的なスペースとしてではなく、暮らしのためのホームグラウンドとして捉えることのできるマザーマップを手に入れる。水系にそって、流域の水辺や、雑木林や、町を巡って楽

しい体験を積み、まずは地べたの空間感覚を身体化する流域市民という名の「地表人」になる。そんな感覚にささえられる「流域思考」を基本にして都市における土地の利用、環境対応を考えていけば、私たちは、もういちど地球に暮らしなおすことができると信じています。

岸 由二

1947年東京・目黒川流域生まれ。慶應義塾大学経済学部教授。理学博士。NPO法人鶴見川流域ネットワーク代表理事。専門は進化生態学、流域アプローチによる都市再生論。三浦半島小網代や鶴見川流域で環境保全・防災支援活動を展開している。代表を務める「小網代野外活動調整会議」は平成24年度緑化推進運動功労者内閣総理大臣表彰を受賞。著書に『自然へのまなざし』、『奇跡の自然』、『環境を知るとはどういうことか』(養老孟司との共著)など。2012年からスタートしたトヨタの市民参加型による水辺の自然再生活動「AQUA SOCIAL FES!!!」のアドバイザーも務める。

※流域思考についての詳細は鶴見川流域ネットワークのウェブサイトや、Facebookページ「流域・日本(Watershed・Japan)」をご覧ください。
<http://www.tr-net.gr.jp>
<http://www.facebook.com/watershed.japan>





地球レポート

地球サミット リオ+20 未来を決める会議からの報告

If you don't know how to fix it, please stop breaking it.
 一直し方のわからないものを、これ以上壊さないでください—
 地球サミットといえばこの言葉を思い出す人も多いかもかもしれません。
 1992年にブラジルのリオで開催された最初の「地球サミット」で
 当時12歳だったセヴァン・スズキが世界に訴えた言葉です。
 あれから、20年。「地球サミット」が再びリオに戻ってきました。

取材・執筆・写真：中村祐介(株式会社エヌプラス) 協力：地球サミット2012 Japan、西岡舞子
 Think Daily「地球レポート」Vol.61 抜粋版



左左) リオ+20の本会議場。政府要人らが集う場所でIDカードがなければ入ることはできない。
 左下) セヴァン・スズキさん。母親となったセヴァンは、自分の子供たちのために、そして次の世代のために環境保全を訴えました。
 右上) 成果文書に意見が反映されていないと本会議場でアピールを行う人々。「Our Red Line」というアクションでユースや女性のチームが主に参加。(提供：Anna Davidson)
 右下) 成果文書の事前交渉の様子。時には反対意見の国と個別交渉をし、調整をはかる。なかなかまとまらず、みな頭を抱える。

伝説のスピーチ再び

すでに世界人口は70億を超え、地球は様々な問題をかかえていないほど抱えています。これから先、どうすれば持続可能で平和な世界を実現できるのか。地球サミットは、国際連合(国連)の最大級の国際会議であり、各国が抱える問題、そして世界が直面している課題を認識し、世界全体で同じ未来を共有するための10年に1度の機会です。NGOやNPOを含めた団体たちも自腹でリオの地まで赴き、メッセージを伝えようとしています。

この地球サミットについて考えるときに、多くの人が思い出すのが、1992年には12歳だったセヴァン・スズキの「伝説のスピーチ」でしょう。大人に、そして世界に環境破壊を止めることを訴えた彼女は今、何を思うのでしょうか？そして社会はあのころの少女の訴えに答えを返せているのでしょうか？

リオ+20の開催直前にセヴァン・スズキの参加が発表されました。「WE CANADA (ウィーカナダ)」というカナダの団体が、直接彼女に交渉し参加が実現。20年振りにリオの地に立ったセヴァンは、もう少女ではなく2児の母親になっていました。当時は子供の視点から大人たちへ素直な気持ちをアピールした彼女ですが、今回壇上に立った彼女のメッセージは力強いものになっていました。

「私自身の未来のために戦うわけではありません。子供たちの未来のために戦う」

本当の声を届ける

今回セヴァンの参加を実現させた「WE CANADA」はカナダ国内でダイアログ(対話型ワークショップ)を繰り返し、市民のリアルな声をカナダ政府へ、そして地球サミットへ届けるという活動をしていました。この「市民の本当の声」を届ける、という点に彼女も共感したといいます。

「カナダ人としてリオ+20で何をやるのかは、はっきりしている。カナダのポジションやカナダ人の気持ちを伝えることです」とセヴァン。これはカナダだけではなく各国にも言えること

ではないでしょうか？自分の立っている位置を強調するという。それは、12歳の少女時代に自分の思いを自分の声で世界に訴えた彼女らしい意見でもあると言えるでしょう。子どもたちへのメッセージも「自分で決断できる力を持つてほしい。自分の声を持って、世界に発信して欲しい。そのために自分自身をしっかり教育してほしい」とセヴァン。

そして、20年前は大人に訴えるだけだった彼女ですが、今回は地球に必要なものについて、はっきりとコメントしました。

「今、必要なものは愛です。愛が希望になります。子供たちへ、そして子供たちの未来へ愛情を持つことが大切。それこそが世界を変える可能性がある」

コメントには大きな拍手が送られました。誰もが言える言葉でもあります。彼女の声がかうも人の心を揺さぶるのは、少女時代からぶれない「思いの強さ」と、12歳で人生を決めた女性の「キャリア」、そして母としての「実感」があるからかもしれません。

「子供のころは地球サミットにもっと希望を持っていた。ここで世界が変わると思っていたんです。けど今はインターネットや多くのコミュニケーションツールを使って世界を知ることができます。だからこそリオ+20が終わったあとが大切で、私たちは政府や世界の動きを見続けなければいけないのです」

みんなが同じだけ不幸である

地球サミットの成果文書に含まれる具体的な課題は、現在私たちが直面している7つの問題——仕事、エネルギー、都市、食糧、水、海、災害——です。

今回リオで再び開催された背景には、人口が増え、経済発展しているブラジルに、世界が抱える問題が集まっていることが理由だとも言われていました。そのリオの地で行われる本会議の3日間と、それに向けての事前交渉がこれからの未来への道筋を立てるのです。

ですが、この道筋を立てるのが極めて困難な作業です。70億人もの人口を支える地球では、先進国と途上国、それぞれの国の立場や目指す

社会が違うからです。ここで生まれる成果文書はあくまでも未来への指針。このあと世界がどう動いていくかが重要で、実際の私たちの生活にも関わってきます。地球サミットはマイルストーンであり、スタート地点であるということなのです。

成果文書は本会議の場で採択されます。先進国と途上国の双方がどこまで歩み寄れるのかが争点になります。たとえば先進国の資金負担について、途上国は資金を出してほしいと思ひ、先進国は未曾有の不況下、途上国が期待するほどのお金をだせるか悩ましい……また先進国は途上国を含めた各国の自然資本について把握したいと言ひ、途上国は自分の国でリサーチをすることができないと反対する……など、こうしたやりとりが様々な問題で行われます。

交渉は議長が仕切りますが、何度も中断し、日々8時間以上続けられます。地道な話し合いから成果文書は作り上げられ、本会議で各国の首脳陣らによって、全世界に発表されます。

ですが、リオ+20ではこの最終の事前交渉の場においても文書がまとまりませんでした。話し続けてもまとまらないこの文書をどのようにして成果文書にまで仕上げたのでしょうか。

15日の最終交渉日を終えたあと、議長国であるブラジルが議長案として文書をまとめました。議長案は今までの事前交渉でまとまらなかった部分を排除するという大胆なものでした。このときにブラジルが言った言葉がこの交渉の難しさを物語っています。

「Everyone is unhappy. (みんなが同じだけ不幸である)」

この議長案をもとに成果文書が作られました。

次の10年で日本が出来ること

リオ+20で採択された成果文書はすでに述べたとおり、次の10年への指針です。ここから日本が何をすべきか、どういった未来へ向かうべきか見えてくるのでしょうか？国内準備委員会の共同議長を務めている三菱総合研究所理事長の小宮山宏さんは「日本が新しいモデルケースになれる」と言ひます。

「中国やアメリカが世界中の二酸化炭素の半分

の量を放出しています。この大きな国が急に二酸化炭素の量を減らすのは難しいかもしれません。だけど、日本はできるんです。日本の資源を正しく生かし、技術を使えば地球のモデル国家になることが可能です」

小宮山さんは林業を例に話してくれました。「いま、木材を輸出している国はアメリカ、カナダ、ニュージーランドなどです。その国に注目すると木材を大規模な産業として扱っていることがわかります。日本の林業はどうでしょうか？きちんと産業化されているのでしょうか？」

自国の資源をきちんと利用し産業にすることで雇用が生まれたりします。そうやって抱えている問題が減っていくことで持続可能な社会が生まれていきます」

日本が自給国家になることで世界に対してモデルケースとなれると小宮山さんは言ひます。

20年前に12歳だったセヴァン・スズキが問ひかけた「直し方のわからないものを、これ以上壊さないでください」という言葉の答えを探していた今回のリオ+20。その答えになるかもしれないメッセージが次の小宮山さんの言葉の中にあるかもしれません。

「今回の地球サミットでの最大の成果は、やはり顔を合わせてみんなが話をしたことです。インターネットが普及し、TwitterやFacebookなどのソーシャルメディアを多くの人が利用することで世界が狭くなりました。でも人は顔を合わせて問題を解決することが必要です。インターネットが普及したことで、多くの国で長年の問題や課題を壊すことはできた。では、壊したあとどうするのか？世界は国家だけでは動きません。市民や学者を始め、多くの人が向き合っって話し合うことが大切なのです」

「地球サミット リオ+20。未来を決める会議からの報告」のレポート完全版はThink the EarthのウェブThink Daily「地球レポート」でご覧いただけます。各国の意見調整の様子や今回の成果文書に対するキーパーソン意見なども紹介しています。ぜひご覧ください。
www.thinktheearth.net/jp/thinkdaily

2005年に始まった市民出資

飯田市は長野県南部、南信州と呼ばれるエリアの中核都市です。都内からは高速バスで4時間ほど。面積は東京23区を合わせたよりも少し広いくらいですが、人口約10万5000人のゆったりとした都市です。河岸段丘の高低差があるまち並みは南アルプス、中央アルプスの美しい山々に囲まれ、どこから見ても絵になる風景です。

飯田の日照時間は国内最高レベルの年間2000時間超。元来「おひさまエネルギー」に恵まれた土地とあって、近年の太陽光発電の急速な広まりも、飯田ならではの仕組みをともなって実現してきました。

「おひさま進歩エネルギー」が2005年に始めた市民出資による太陽光発電事業では、保育園など公共施設や事業所162カ所に太陽光パネルを設置。補助金や買い取り制度などの優遇措置もあり、2012年度は市全体で400件を超える勢いで設置が進んでいます。特に、設置費用0円で太陽光発電を始められる「おひさま0円システム」は個人住宅での普及の追い風となりました。

0円システムは「おひさま進歩エネルギー」が希望者の住宅の耐震強度などを調査した上でメーカーや設置業者を選定し、設備を無償で取り付けるというもの。住民は9年間電力のサービスを受け、その間メンテナンスなどのサービスを受けつつ、月1万9800円のサービス料をおひさま進歩に支払います。10年経ったら設備は住民に譲渡されます。

市民出資が成功した要因を、おひさま進歩エネルギーの中心人物である原亮弘さんは「市職員の熱意も大きかった」と振り返ります。市民ファンドは出資者に10年、あるいは15年（延長で20年）でお金を返していく計画でしたが、行政財産である保育園や公民館の屋根での発電は地方自治法で「目的外使用」に当たります。長期間の契約は先例がありませんでしたが、20年間確実に借りられなければ市民ファンドの信頼にかかります。担当課と管理側で自然した議論が起りましたが、最終的には市長判

断で許可が下りました。立ち現れた行政の壁と一緒に乗り越えた当時の職員は、今でも原さんの大切な友人であり、協力者だと言います。

子どもの「科学の心」を支援する

これまでに5つの市民ファンドが立ち上がり、出資額はすべて順調に集まりました。市民有志の寄付という形でパネルを設置した記念すべき第1号は市内の明星保育園でした。

明星保育園では太陽光発電の存在を日ごろの保育に上手につなげています。園では連絡帳を通して保護者と日々コミュニケーションをとっていますが、そこから生まれたのが環境に特化した「おひさま便り」という園便り。「家でも電気を消して回り、ついに主電源まで消してしまっただ！」などと、園で高まった省エネ意識を家でも発揮している子どもたちのほほ笑ましいエピソードがたくさん寄せられるようになり、皆で共有しようと月1度の発行に。

また、園では科学教育にも取り組んでいます。小さな手作りのソーラーカーで遊んだり、アルミを張ったスピーカー型の手作りソーラーオーブンで集光してお湯を湧かしたり。「科学の心」って、保育の基本につながることに気づいたんです。子どもの気づきをどう解決するかを保育士が支援をして、子どもたちが自ら検証していけるようにするのは、まさに日々の保育と同じ」と主任の山内ひろみ先生。

こうした市民有志の運動から始まった太陽光の先駆的な取り組みは、飯田市にとっても大きなターニングポイントとなりました。0円システム立ち上げの際、地元の信用金庫がきちんと融資してくれたのも「新しい自然エネルギービジネスの実績に金融機関が可能性を見いだしたからこそ」と飯田市の担当課である地球温暖化対策課の小川博さんは言います。

そして、太陽光に続いて今、飯田で最もホットな自然エネルギーが小水力発電です。小水力とは1万キロワット以下の水力発電のこと。太陽光以外にも広がる自然エネルギーの固定価格買い取り制度や法律緩和の動きなども見据えて、総務省「緑の分権改革」推進事業の委託を受けた実証調査が市南東部にある上村の小沢川で行

われています。

小沢川は流量が安定していて取水での落差もとれ、周囲に発電所の建物をおくスペースも十分にあるなど、小水力発電所設置の必要条件を満たしていました。今年度は実際に発電が可能かどうか、細かな流量実測を行っていきます。また実現に向け、村内関係者との協議も2011年度から始まりました。

太陽光に加え小水力発電も

上村は標高約1000メートル。過疎化が地域の大きな課題ですが、逆に小水力発電によって地域を活性化できる可能性のある場所です。固定価格買い取り制度で得られる収入をキャッシュフローに金融機関からの融資や地域内外からの市民出資を受け、事業の利益を地域の様々な課題に分配していけるような市民参加型の事業の仕組みを構想しています。

行政がかかわる大きな理由は、国土の保全上、大切な資源である河川での発電事業は公益性に加え、採算性もきちんと確保しなければならないため。河川は基本的に国の管轄ですから河川法や森林関連の法律、電力事業法と国の各省庁や電力会社が絡む様々な法律がかかわってきます。個々の建物で完結する太陽光とは違って実現までの道のりが険しいことは確かですが、だからこそ「地域全体がかかわることのできる可能性を持った自然エネルギー」と小川さんは前向きにとらえています。

「右肩上がりの経済ではなく、環境付加価値の高い暮らしをしていることをPRしながら、都市部の人たちの定住や交流を引きつけられるよう結びつきを強めていく。数値目標だけでなく、そういう結びつきが起爆剤となって新しい地域が生まれていくことをうまくイメージできるといい」

お金と思いを「見える化」させる

寄付型の3キロワットの太陽光パネル設置から始まった取り組みが5年余りで162カ所に広がり、今ではバイオマス、そして、小水力も組み入れたエコタウン構想へと広がっています。

南信州全体で約5万世帯あると考えると、太

陽光の広がりもまだ微々たる変化なのかもしれませんが、市民出資という形でお金の動きを「見える」ようにしたこと、そのことがとても大きな意味を持ったように思います。「トヨタ自動車が70年前に1台の車づくりから始まったように、おひさま進歩エネルギーも70年後が楽しみ」と、原亮弘さんは顔をほころばせます。

震災後の需要の高まりを受け、太陽光に参入する会社も増えていますが、原さんのスタンスは変わりません。「大手にできないこともいっぱいあると思うんですよ。規模はあってもある程度の利益が出ないと手を出しにくいとか。そこをどう地域で丁寧に取り組むか。まさにソーシャルビジネス。そこが一番大事だと思いますね」

飯田市は森林率84%と森林資源にも非常に恵まれた中山間地域ですが、原さんも「最もダイナミック」と注目するのがバイオマス。市では7年前から南信州バイオマス協同組合が端材から作るペレットを学校や公共施設でストーブの燃料として利用したり、薪ストーブの愛好家が森に入って薪を切り出す「薪(まき)人」事業などを熱供給政策として展開しています。

山の木を切り出し、建築用材と建築用材にならなかったものの2つの大きな流れにたくさんの方がかわり、雇用も生まれます。これまで切り捨てておくしかなかった間伐材を搬出することで流通経路ができ、森の資源が循環していく。自然エネルギーは割高だと言う人もいますが、安い、高いだけの観点ではなく、森や川とのかかわりなど、付随する多面的な価値を読み取る力が、市民に求められています。自然エネルギーという切り口から見れば、飯田のような中山間地はまさにエネルギーの宝庫。日本地図がまったく違って見えてきます。

「エネルギーを市民の手に ～おひさま進歩エネルギーの取り組み」のレポート完全版はThink the EarthのウェブThink Daily「地球レポート」でご覧いただけます。徹底した熱利用で省エネする温泉旅館など、省エネルギー事業についても紹介しています。ぜひご覧ください。
www.thinktheearth.net/jp/thinkdaily



エネルギーを市民の手に ～おひさま進歩エネルギーの取り組み

自給率がたった4%と言われる日本のエネルギー。
東日本大震災前からエネルギーの地産地消を高く目標に掲げ、
太陽光や森、水といった自然の恵みを電気や熱源に活用する
プランを積極的に検討してきたのが長野県飯田市です。
エネルギーをコミュニティの中に取り戻そうと熱心に取り組む
同市の中心的存在、おひさま進歩エネルギー取材しました。

取材・執筆：岩井光子 写真：イノマトシ 写真提供：おひさま進歩エネルギー
Think Daily「地球レポート」Vol.60 抜粋版



左上) おひさま発電所第1号となった明星保育園。市民ファンドによって、建物の屋根に太陽光発電パネルが設置された。
左下) 明星保育園の子どもたち。園で発行している「おひさま便り」には毎月の発電量に関するクイズも。
右上) おひさま進歩エネルギー代表の原亮弘さん。もともと金融サービス業に勤めていたサラリーマン。故郷で温暖化問題に貢献したいと会社員生活にピリオドを打ったのが11年前の51歳のとき。NPO法人南信州おひさま進歩としてスタートし、現在は株式会社。
右下) 飯田市の地球温暖化対策課の小川博さん。「取り組みを太陽光だけに終わらせるのではなく、地域全体の取り組みに広げたい」。

東日本大震災の復興支援「忘れないプログラム vol.1」

『大友克洋GENGA展×
忘れないプロジェクト』

支援先6団体の皆さんに会ってきました。

2012年4月9日から5月30日まで、宮城県出身の漫画家 大友克洋さんの原画展が行われ、入場料収入の3分の1とYahoo! Japan チャリティオークションの落札金額が、「忘れないプロジェクト」を通じて6つの団体に寄付されました。寄付の使い道、そして震災から1年半が経った「いま」の話をお聞きするため、Think the Earthスタッフが寄付先の6団体を訪問。「(原画展の開催は)3.11 東日本大震災を抜きには語れない」という大友さんの思いは、しっかりと現地に届いていました。

東日本大震災「忘れないプロジェクト」ページで、報告動画が見られます。
<http://www.thinktheearth.net/jp/wasurenai/program/>

田んぼの作業が地域文化を
紡ぎ直し、復興の架け橋になる。

特定非営利活動法人 田んぼ

南三陸町志津川熊田地区の田んぼで待望の稲刈り。海から3km近く離れたこの地にも津波でガレキが押し寄せ、田んぼには車が埋まっていた。全国から集まったボランティアがガレキの撤去を手伝い、今年の米作りが実現したのです。収穫指導をするのは地元農家の方々。ボランティアさんは差し入れのサツマイモをほおぼりながら、地域の豊かさを実感していました。こうした農作業を通じて人が集まることで、被災でバラバラになった地域を紡ぎ直すきっかけにもなります。今回の寄付は、被災田んぼの継続的なモニタリングなどに使われています。

宮城県大崎市田尻大貫字荒屋敷29-1
☎0229-39-3212
<http://npotambo.com>
寄付金額¥2,382,085



今年収穫された「福幸米」を手にする代表の岩淵成紀さん。

震災前よりも魅力的な朝市で
全国の支援に応えたい。

ゆりあげ港朝市協同組合

震災後わずか2週間あまりで仮設朝市を再開して以来、閉上の復興を牽引。寄付は保健所の営業許可に必要なプレハブ設備購入に充てました。来春、もとあった場所で本格再建予定ですが、町は津波で流され、以前のように地域の人が徒歩や自転車で来られるようになるまでには何年もかかりそうです。

「買った魚をその場で調理して食べられる食堂をつくるなど、前よりもっともっと魅力的な朝市をつかって、地元の人はもちろん、観光客にも楽しんでもらえるようにしたい」と代表理事の櫻井広行さんは今日も資金集めに奔走しています。

宮城県名取市美田園7-1-1
関上さいかい市場G棟2F
☎022-395-7211
<http://asaichi.yuriage.jp>
寄付金額¥2,180,094



朝市名物のせりを仕切る櫻井さん。

子どもが外で遊べない日常は
これから何年も続きます。

福島の子どもの外遊び支援ネットワーク

「除染をしても園庭の線量は高いので、子ども達を外で遊ばせられないんです。線量計を持って歩きながら数値の低い場所を探し、散歩コースを決めています」。郡山から猪苗代に子ども達を連れて外遊びに来ていた保育園の先生のお話は、今後何年も外遊び支援を続ける必要があることを再確認させてくれました。子ども達をバスで連れてきて遊ばせるのに必要な費用は、ざっくり見積もって1回10万円。これからは行政の支援が受けづらい無認可の小規模な保育園の支援を充実させていきたいと、代表の橋口直幸さんは話してくれました。

福島県耶麻郡猪苗代町
大字長田字東中丸3449番地31
☎0242-72-1181
<http://www.sotoasobi.info>
寄付金額¥7,866,457



お外でいっぱい遊んだ子ども達を、橋口さんが笑顔でお見送り。

海の仕事を次世代につなぐため、
産直や自然エネルギーに挑戦。

北浜わかめ組合虹の会

地盤沈下した港にはまだ津波の傷跡が残っていますが、震災前から考えていた産直販売を実現するため「とにかく質の高いわかめを作るだけ」だと、虹の会の皆さんは口をそろえて言います。寄付で購入した冷蔵庫のおかげで、来年からは加工した塩蔵わかめが1年を通して出荷できるようになりました。電力を太陽光発電でまかなえるようにするのが次の目標です。

若い人にも漁業を続けてもらいたいから、自分たちがいま頑張らねば、と代表の細川周一さん。現在、第2期の復興サポーターを募集中。サポーターには来年5月頃にわかめが届きます。

岩手県大船渡市末崎町上山176-8
☎0192-29-3207
<http://www.niji-wakame.com>
寄付金額¥2,226,296



わかめの養殖場に向かう代表の細川さん(左)と紀室秀則さん(右)。

障害者も高齢者も、生きがいと
誇りを持つための手助けが必要。

AAR Japan[難民を助ける会]

震災などの非常時、自分でなかなか声をあげられない高齢者や障害者の言葉を代弁し支え続けているのが、難民を助ける会です。今回の寄付では、原発事故で畑や養鶏場が放射能被害を受けた福祉作業所の支援1件、仮設住宅の高齢者のための菜園づくり支援2件を行いました。

取材で訪ねた郡山市の社会福祉作業所「にんじん舎」では、責任者の和田庄司さんが「若い職員が辞めずに働いてくれているんです。何度も悔しい思いをしたけれど、彼らと頑張りたい」と静かに語ってくださったのが印象的でした。

東京事務局：東京都品川区上大崎
2-12-2 ミズホビル7F
☎03-5423-4511
<http://www.aarjapan.gr.jp>
寄付金額¥2,390,588



支援先のひとつ、福島県郡山市の共同作業所「にんじん舎」の和田さん。

故郷の知恵と技術を活かした
弁当づくりで再び笑える場所を。

かーちゃんの力・プロジェクト協議会

原発事故により家も畑も失った「かーちゃん(女性農業者)」。代表の渡邊さんは避難先で意気消沈していたかーちゃんたちに声をかけ、故郷の知恵と技術を活かした弁当づくりを始めました。これまで野菜は自分で作っていたかーちゃんたち。今では全て購入しなければなりません。貴重な食材で作った弁当も、毎日1キロを放射性物質検査で失います。1キロの重みと想いをこめて、20ペクレル未満の弁当に笑顔のシールを貼って届けています。寄付は、倉庫を事務所にするため屋根の除染や改装に使われました。現在サポーター会員も募集中です。

福島県福島市松川町金沢字船場3-27
コミュニティ茶館「あぶくま茶屋」
☎024-567-7273
<http://www.ka-tyan.com/>
寄付金額¥2,138,895



故郷の味と笑顔で被災者を元気づけてきたかーちゃん達。

※寄付額について 原画展来場者が投票で寄付先を選択し、票数に応じて寄付額を決定しました。オークション、投票がなかった分の入場料からの寄付金は6団体に均等に分配しました。

復興活動団体の今がわかる
東日本大震災「忘れないプロジェクト」

復興支援活動の報道も減少傾向にあるこの頃。現地で活動を続ける団体を長期的に支援し、風化させないための仕組みをつくる「忘れないプロジェクト」では3つの活動を行なっています。

①信頼できる団体やプロジェクトの広報支援、②企業や個人からの寄付を取りまとめた復興活動団体へ資金援助を行う「忘れない基金」、そして、③被災された方々や支援団体の想いに共感する個人、企業、NPO/NGOとともにオリジナルのプログラムをつくる「忘れないプログラム」です。

ウェブサイトのトップページでは、復興に向けて東北で活動を続ける団体のブログやニュースをRSSで収集し、リアルタイムで更

新しています。各団体の活動の様子はもちろん、ボランティア募集情報やイベント情報なども発信されていますので、ぜひこまめにチェックしてみてください。

2013年1月からは、少人数でも参加しやすいチャリティプログラム「未来の自分への手紙(仮)」をスタートする予定です。学校や会社、同窓会やイベント会場など、だれでもどこでもできるプログラムです。詳細は2013年1月にウェブサイトで発表いたします。

忘れないプロジェクトウェブサイト
<http://www.thinktheearth.net/jp/wasurenai/>

[忘れない基金]への寄付について

企業や個人からの寄付を基金に積み立て、復興活動を行う団体へ、すぐに役立ててもらえる資金を援助します。

寄付先団体(2012年12月実施予定)：一般社団法人おらが大槌夢広場/NPO法人子育て支援コミュニティ・ブチママン/NPO法人日本冒険遊び場づくり協会/被災地障がい者センター南三陸/NPO法人ワークショップあいあいリサーチ協力：一般財団法人 地域創造基金みやぎ、NPO法人いわて連携復興センター

銀行口座：みずほ銀行 青山支店(普通) 2085931
お振込先 口座名義：一般社団法人シンク・ジ・アース 忘れない基金
カナ表記：シャ) シンク ジ アース ワスレナイキキ

※必ず口座名を確認の上お振込ください。※一度お振込いただいた寄付金の返金はいたしません。※当基金への募金は税控除の対象になりません。あらかじめご了承ください。※集まったご寄付より10%を上限として本基金を継続するための必要経費に充てさせていただきます。

地球検定 [上級編]

知っているはずの基礎問題から環境キーワードまで、全15問であなたのThink the Earth度をチェック。

1 世界三大流星群と呼ばれる次の流星群のうち、1年の初めに見られるものはどれでしょう？

- A**ふたご座流星群 **B**ペルセウス座流星群
Cしぶんぎ座流星群

2 宇宙の構成を研究した結果、目に見えるものはたったの4%で、残りの73%は謎のエネルギー、23%は正体不明の物質であることが分かりました。この物質は、何と呼ばれているでしょう？

- A**ブラックマター **B**ミステリーマター
Cダークマター

3 地上約400kmに建設された有人実験施設「国際宇宙ステーション」。日本を含め15カ国が参加するこの施設の広さはどのくらいでしょう？

- A**テニスコート1面分
Bサッカーコート1面分
C東京ドーム1個分

4 日本でよく知られているゲンジボタルとヘイケボタル。光るのは、卵・さなぎ・幼虫・成虫のうち、どれでしょう？

- A**すべて光る **B**幼虫と成虫のみ **C**成虫のみ

5 外国からやってきて、元からある生態系に影響を及ぼすとされる外来種。次の動物のうち、日本に輸入されて来た外来種ではないものはどれでしょう？

- A**ウシガエル **B**アライグマ **C**ジュゴン

6 人類最古のミイラは、1991年にイタリア・オーストリア国境のエッツ渓谷の溶けた氷河で発見された、約5300年前の男性のミイラです。その愛称は？

- A**アイスマン **B**アイスモンスター
Cスノーマン

7 生物はたくさんの細胞からできています。ヒトの身体を構成している細胞の数は、いくつでしょう？

- A**約60億個 **B**約6,000億個
C約60兆個

8 米誌フォーブスが発表した「人口密度の高い都市トップ20 (2010年)」において、ベスト10にランクインした都市が最も多かった国はどこでしょう？

- A**インド **B**中国 **C**パキスタン

9 日本の人口は、2055年には現在の約1億2,500万人から、約9,000万人にまで減少すると言われています。ではこのとき、最も多いと予想される年齢は何歳でしょう？

- A**61歳 **B**71歳 **C**81歳

10 東日本大震災後、高まっている防災意識。そのキーワードとして「自助」「公助」と共に掲げられている言葉は？

- A**民助 **B**互助 **C**共助

11 日本にやってくる台風は、北西太平洋で発生した熱帯低気圧が発達したものです。では、インド洋生まれのものをなんと呼ぶ？

- A**ハリケーン **B**サイクロン **C**タイフーン

12 再生可能エネルギーとして日本でも導入が進められている太陽光発電。世界一の導入量を誇る国は？

- A**スペイン **B**ドイツ **C**日本

13 「世界三大料理」と言えば、中華料理、フランス料理、トルコ料理。では「世界三大穀物」は、小麦と米、もうひとつは何でしょう？

- A**トウモロコシ **B**ライ麦 **C**大豆

14 全発電量における原子力発電の割合が世界一高いのは、「原子力大国」と呼ばれるフランスです。では逆に、原子力発電を持たないのは次のうちどの国でしょう？

- A**イギリス **B**ドイツ **C**イタリア

15 人工林が荒廃してしまうのを防ぐために行う間伐。女性や子どもでも無理なくできる、今注目の間伐方法を何と呼ぶ？

- A**皮むき間伐 **B**根こそぎ間伐 **C**枝切り間伐

A1 **C**しぶんぎ座流星群
「しぶんぎ座流星群」は日本では毎年1月4日前後に極大を迎えます。8月に出現するのが「ペルセウス座流星群」でちょうど日本ではお盆にあたる8月13日前後。残る「ふたご座流星群」は、年の瀬の12月14日前後です。(※極大となる日時は年によって前後します)

A2 **C**ダークマター
ダークマター、または暗黒物質と呼ばれる物質は、宇宙の構造を成り立たせるためには必要なのに、目には見えないもの。日本の国立天文台では、この物質の正体を明らかにすべく、ハワイ島の「すばる望遠鏡」に、視野が広く、高解像度の観測装置を導入し観測をしています。

A3 **B**サッカーコート1面分
「国際宇宙ステーション」は、アメリカのNASA、ロシア連邦宇宙局(FSA)、欧州宇宙機関(ESA)、カナダ宇宙局(CSA)、そして日本の宇宙航空研究開発機構(JAXA)が、それぞれ開発した5つの実験モジュールや居住施設などによって構成されています。

A4 **A**すべて光る
ホタルは、成虫だけでなく、卵もさなぎも幼虫も光ります。ホタルの成虫は、光ることで暗闇の中でお互いを見つけ合えます。一方で、卵やさなぎ、幼虫が光るのは、敵を驚かすためと言われています。

A5 **C**ジュゴン
ウシガエルやアライグマは日本に生息する外来種として知られています。外来種の与える影響として、古くから生息する在来の種を食べてしまったり、生息環境を奪ったりしてしまうことがあります。一方、ジュゴンは沖縄の海に昔から生息している動物で、外来種ではありません。しかし、現在はわずかに50頭以下と絶滅の危機に瀕しており、保護活動が続けられています。

A6 **A**アイスマン
「アイスマン」は、完全な姿を残す人類のミイラとしては最古のものです。発見以来、科学者たちによってあらゆる角度から分析が進められ、目は茶色、血液型はO型、牛乳が苦手だった可能性が高い、などの諸説が発表されています。

A7 **C**約60兆個
約60兆個、種類にすると約200種類もの細胞からできています。早いものは1~2日で死んでしましますが、脳細胞は生涯生き続けるものもあり、細胞の種類によって寿命も様々。私たちの身体の中では、毎日、細胞の生死が繰り返されています。

A8 **A**インド
インドからは、国内最大の都市ムンバイ(1位)、カルカッタ(2位)、チェンナイ(8位)の3都市がベスト10にランクイン。ちなみに中国は、深セン(5位)、上海(10位)の2都市がランクインしています。

A9 **C**81歳
高齢化と少子化が進み、2055年には、平均年齢が55歳、65歳以上が40%を超え、人口で最も多いのは81歳になると予想されています。このような高齢化社会の到来により、各種社会保障における若年層への負担が今まで以上に増えることが推測されており、年金設計の見直しなど各種制度の見直しが、現代社会の重要な検討課題となっています。

A10 **C**共助
自らの生活を見なおし、備えをする「自助」。行政や企業などからの支援を受ける「公助」。そして、隣近所の人々、同じコミュニティに属する人々で互いに助け合う「共助」。防災を考える上では、これら3つを合わせて考えることが、とても大切です。

A11 **B**サイクロン
「台風」の定義は、北西太平洋で発生した熱帯低気圧で最大風速(10分間平均)が34ノット(17.2m/s)以上のものですが、同様に発生地域によって呼び名が変わります。インド洋と南太平洋で発生したものを「サイクロン」、北東太平洋、大西洋で発生したものを「ハリケーン」と呼びます。

A12 **B**ドイツ
ドイツでは、太陽光によって発電した電力を電力会社が高価で、しかも長期に渡って買い取る制度が定められ、一般家庭にも急速に普及しました。日本でも2012年7月より「再生エネルギーの固定価格買取制度」がスタートするなど、普及への取り組みが進められています。

A13 **A**トウモロコシ
食用としてのトウモロコシの消費が多いのは、メキシコやアフリカ諸国。日本でも知られる「トルティーヤ」や、トウモロコシ粉から作る「サザ」や「ウガリ」などの食品として消費されています。

A14 **C**イタリア
イタリアは、1950年代後半から最先端の原子力発電の研究開発を開始し、1965年時点では3カ所の原子力発電所が稼働していました。しかし、チェルノブイリ原発事故などがきっかけとなり、1987年の国民投票で原発の全面停止を決定、運転を停止しました。その後、再開計画が進んでいましたが、2011年の東日本大震災における原発事故を受け、この計画を一年間「凍結」することが決まっています。その他に原子力発電を持たない先進国には、ノルウェー、ポーランド、アイスランドなどがあります。

A15 **A**皮むき間伐
木が水や養分を循環させている樹皮を環状にカットし、樹皮を上方まではがして木を立ち枯れさせていく方法です。切り倒す前に乾燥させるため軽くなり、伐採や運搬時に、比較的楽に作業を行うことができます。この手軽さから、日本の各地でボランティアの手による作業が始まっています。

Think the Earth

www.ThinktheEarth.net/jp

一般社団法人Think the Earthは「エコロジーとエコノミーの共存」をテーマに2001年に発足したNPO(非営利団体)です。クリエイティブやコミュニケーションの力で、日常生活のなかで地球や世界との関わりについて考え、行動する、きっかけづくりを行っています。環境や社会問題への無関心とあきらめの心こそ最大の課題ととらえ、ウェブサイトや書籍などで情報発信を行っているほか、企業やNPO、クリエイターとともに誰もが参加できるプロジェクトを開発・提供しています。

発行●一般社団法人Think the Earth 〒150-0033 東京都渋谷区猿楽町3-1 エムワイ代官山201
TEL 03-3464-5221 FAX 03-5459-2194 E-mail tte-office@ThinktheEarth.net
発行日●2012年12月
編集統括●上田社一 編集●岡野 民 編集協力●原田麻里子 長谷部智美 協力●池田美砂子
制作●曾我直子 デザイン●武田英志 阿知波花恵(hoop)
地図協力●江良弘光(特定非営利活動法人流域自然研究会) 伊藤隆広(特定非営利活動法人鶴見川流域ネットワーク)
印刷●株式会社日精ビーアール

2012年度パートナー企業 (2012.4.1現在 五十音順)

e-天気.net
株式会社NTTデータ
KDDI株式会社
サラヤ株式会社
ソニー株式会社
株式会社堀場製作所
三井不動産株式会社

NTT DATA

変える力を、ともに生み出す。

本紙、およびウェブメディア[Think Daily]は、株式会社NTTデータのご協力により制作しています。Think Dailyでは、世界各地で注目の人や活動取材する「地球リポート」(年4回)や国内外のリポーターによる「地球ニュース」が好評掲載中です。
<http://www.thinktheearth.net/jp/thinkdaily/>

Think the Earth Paper 電子版

本紙のバックナンバーも下記ウェブサイトにて閲覧できます。

<http://www.thinktheearth.net/jp/ttepaper/>



何かを夢見る人のために。誰かを想う人のために。



data for:

the people

NTTデータは世界中で、人を支えるソリューションをつくっています。

ショッピングサイトで、誰かにプレゼントを贈る人がいます。

大学や企業のシステムを使って、最先端の研究にチャレンジする人がいます。

病院や災害の現場で、データを駆使して誰かを助ける人がいます。

「データ」は、いつもそこにいる人々のためのもの。それは私たちの毎日をより豊かに変えていってくれるものだと、NTTデータは信じています。